良斉は広島在陣中に病をえた老中水野出羽守忠誠につきそって大坂にかえり、ついで大坂から病兵をひきつれて帰府した。

この御用留には、以上のべた歩兵組の出動にあたって同行する附添勤務医師の記事のほかに、医師の手当や薬料のこと、蓄髪のこと、服装のことなどがしるされている。

（順天堂大学医学部医史学研究室）

医師マンローの業績

桑原千代子

第八四回横浜総会に於ける抄録発表の永い歴史を有する横浜山手病院は、三年前解体され既に跡片もない。八代目院長のマンローは軽井沢サナトリウム院長を経て、医学の他に考古学・人類学上不朽の業績を残し、終焉地となる北海道沙流郡平取村二風谷（ニブタニ）アイヌコタンへ、故国のロンドン大学セリーグマン人類学教授の推挙で、ロックフェラー研究奨励金を得て昭和五年秋任くのだが、人類学研究よりもアイヌ民族が様々の疾病に苦しみ、特に和人より感染した結核は猛威を振い、当時三五戸のコタンから年間二七個の結核死による大人の柩を出した。小児の死亡数も入れると約三倍になる事に驚き、結核撲滅を主に医療に献身する。

後石器時代から縄文期にかけて全日本列島に居住したアイヌ民族が、蝦夷征伐の名の下に次第に北へと追いつめられ、最後の砦となった蝦夷地（アイヌ・モシリ）すらも和人の入植で次第に侵

され、更に明治政府による旧土人保護法は狩猟民族から農耕民族へと生活の激変を余儀なくさせた。生活形態の激変は一民族の滅亡に繋りかねない。マンローの憤激は彼をして最晩年の一二年間を、この神への虔しい祈りと勇壮な生活史から一転、今貧惨の極にある人々の医療に献身するターニングポイントとさせた。

借住い時の火災で永年研究の膨大な成果や蔵書・家財の一切を失い、狭心症の発作に襲れ生涯の持病となり苦しむ。故国と日本亜細亜協会の学者達や、軽井沢等旧縁の人人の激励援助により再起。様々な理由で遅れていたマンロー館も昭和八年四月二五日完成（戦後転々と売られ競売より英大使館員が私費で買戻し北大へ寄贈・研究施設として保存・顕彰碑建立）X線使用の為全館配線済みで、全コタン工事費の半額負担をマンローが申出ても、村当局の財政難で終戦後迄実現せず役立たず終る。だが当時は北大・旭川鉄道・同衛戍病院等以外一般の開業医はX線の設備は有しなかった。

診療は一切無料で貧窮に喘ぐ患家へは秘かに米・卵類を届けさせ子供達にはチョ夫人手造りの菓子が配られた。広大な庭園には果樹栽培でコタンの生活を建直そうと、実験的に梨・林檎・葡萄・苺・グズベリー・胡桃・アスパラガス等の苗を取寄せ育て、手入れの日当もコタンの人々の生活を扶け、収穫も一年分の自家製ジャム作りだけで残り全部コタン中に頒けられた。ワイン造りから土壌の研究迄学び、沙流川畔にスケートリンクを作り観光客を誘致し、丘の上に大サナトリウムを造る夢を説いた。

患家を熱心に往診し大気・栄養・安静の三原則で個々の病状に合せ日課表を作り厳格な療養指導をした。アイヌの家は東の神窓（チセ）たゞ一つ（ルロンプヤラ）なので換気と家族内感染に心痛し最大限の対策を施した。他の疾病の治療と夫人は助産婦としても大活躍・全コタンの夫妻への信望は絶大で、未だに尊者（ニンパ）マンローと敬慕は篤い。

然し昭和一一年頃からマンローの医師資格を問う奇妙な噂が村内の開業医達から広まった。道庁長官の許可なく診療活動を続けるのは法律違反だと言う。昭和八年一一月から施行された内務省令による『診療所取締規則』の開業届が出ていない事を批判されたのだ。既に研究費送金も終り経済的不如意のマンロー夫妻を親身になって相談に乗った

道庁役人の谷万吉氏の奔走で、正式に開業届を提出し静内・沙流・新冠（ニイカップ）の医師会加入もし、翌昭和一二年一月二五日『マンロー診療所』は正式に道庁衛生課の台帳に登録された。（谷氏は後日道庁資料室へこの時の道庁諮問への回答書下書と、三六通の貴重なマンロー書簡を寄贈された）長文ゆえ重要点に絞り紹介したい。

A、一八八八年エジンバラ大医学部卒・医学士・外科修士・二〇年後母校の試験に合格・医学博士—M・D

B、アイヌ民族につき人類学的研究を始めた動機と二風谷を選んだ理由、前途への見通し

C、横浜・軽井沢でも病院長だったし規則改正を知らなかった。無医村の二風谷で貧しい人々を助ける為の無料診療を理解してほしい。研究費送金も終り軽井沢夏季診療報酬と財産を売ってそれらの支出に当てている。

D、私がみた病気の全ての種類を述べると、結核は殆ど凡ゆる病型が見られ、虫垂炎は少く胃腸病患者の全てが世界中共通の様に回虫によるものらしい。トラコーマ・膿痂疹・疥癬・気管支炎・ロイマチス・インフルエンザ・貧血はかなり多く梅毒は感染後かなり古い。精神病・ノイローゼ・アイヌ女子特有の『イム』（感応性神経症）を挙げ、賢いイムとして楽しむ風も挙ぐ。

かくてマンローは手術期を逸した癌を抱え毎夏の軽井沢出張診療報酬だけで経済を支え厳しい官憲のスパイ視に痛めつけられ乍ら最後迄無料診療を続け、春迄の食料の他一銭もない極貧の中で生涯を終った。一九六三年発表の横浜山手病院功労者名簿に追加掲載された。終りにマンロー館庭前の顕彰碑文を掲ぐ。

In Memory of Dr. N. G. Munro 1863～1942

Pioneer in Anthropological Studies in this Country Author of "Prehistoric Japan" and "AINU Creed and Cult"

（駐日英大使館文化部「日本マンロー博士研究会」代表）